

スパルタ・システムの設計者リュクルゴス

渡 辺 浩

A: 先生こんにちは。花の季節になりました。今日は列伝の3人目になるわけですが、英雄時代はこの前の2人で終わりなのですか？

Q: そのとおり。他に興味のある人物、後世に大きな思想的影響をおよぼした人物がいないわけではないが、資料の関係で見送らざるを得ない。そこで今日は暗黒時代から1人だけを取り上げることにしたい。前にも述べた“ヘラクレスの後裔の帰還”によって、ペロポネソス半島のアルゴス、スパルタ、メッセニア3地方にドーリス人の王朝が成立し、輝やかな英雄の時代は終わって鉄の時代に入る。ミューケーナイ時代の主要都市は破壊され、多くの工芸技術は失われ、一部で知られていた文字の使用も忘れ去られる。おそらく侵入した民族はローマ時代のゲルマン人のように、男子皆兵型の集団的社会構造をもっていたのだろう。この侵入の影響をまぬがれたアテナイも含めて生活と文化の水準はいちじるしく低下し、それが500年くらいも続く。鉄器時代に入るとともに生活水準が低下したというのは不思議な話だが、その説明として、気候が変わって雨量が減少し、半砂漠に近い状態になったのではないかと、という人もいる。

そこで標題のリュクルゴスだが……

A: その標題がちょっと気になるのですが、スパルタ・システムを1つのシステムとしてお考えですか？

Q: なかなかよろしい。それでは君はシステムではないと考えるかね？

A: いや積極的に否定するかは別として、われわれのもっているシステム概念に合っているのかなと……。

Q: ではその問題には話の終わりでふれることにしよう。君のシステムの定義を整理しておいてくれたまえ。

そのリュクルゴスというのは、前回のオデュッセウスより数百年も後の時代に比定されるというのに、そこは暗黒時代、その人物の実在性にはかえって曖昧な点がある。前4,5世紀のギリシャ人でも、リュクルゴスがどんな人物なのか、はっきりいえる者はいない状態だった。

リュクルゴスを暗黒時代の中でも比較的新しい時期に

位置づける人がある。前7世紀のスパルタは豊かな貴族制国家で、“スパルタ式”になったのは7世紀末のメッセニアの反乱以後のことだ、という現代の考古学者もいる。そうなるとそれ以前に植民された南イタリアやシチリー島の主要なドーリス人都市は、スパルタ化の洗礼を受けていないことになる。しかし古いほうではリュクルゴスを前10世紀頃に、すなわち帰還した後裔の5,6代後のスパルタ王家の一員として位置づける説もある。さらにリュクルゴスはスパルタを含むペロポネソス各地で祀られていた神の名で、人間の名ではないともいう。この説に従えば、ある改革者が、自分の改革案を神聖化するために神名を利用したことになる。実在説のほうでもアリステレスは、彼を王家の一員でなく中流の出身で、そのスパルタのシステムの起源はクレタにあったという。それに対し、それはドーリス人の侵入がクレタにもおよんだために生じた誤解だ、とする論者もある。

プラトンの対話篇にも登場するテイマイオスは、いくぶん隔たった時代に生きた2人のリュクルゴスの事蹟が、同一人物の事蹟にされてしまった、という説を唱えたという。この説はいささか折衷的に傾くくらいはあるが、利点も多い。年代や人物像に曖昧さや混乱のある点も、これでうまく説明がつくし、ま、一般に口頭伝承の過程では、別人格の同一視がギリシャでも日本でも、時々起こったように思える。またリュクルゴスという名前自体が、決して稀有な名前ではなく、英雄時代にも歴史時代にも何人も見られるし、この説に従えば後のほうの人物は、7世紀頃に弛緩していたシステムを引きしめて、リュクルゴスの古制に復した人物ということになり、その名前も必ずしもリュクルゴスである必要はない。

さてこの線に沿ってプルタルコスの説くところに従えば、古いほうのリュクルゴスはスパルタ王家の一員で、ホメーロスと同時代かその少し後の時代に生きていた。彼の兄が王となり、早世した時、いったん王の1人となった——というのはスパルタは古来2人王制だったので——が、兄王の死後に生まれた子を立てて、その後見役

として政治を見た。そうして人々の心服を得たが、かえって一部からその後見役の地位にあっての野心を憶測される場合もあったので、故国を離れた。

彼はまずクレタにいてその社会システムを観察し、その中で故国に取り入れるべきものとそうでないものを選別した。次にイオニア諸島にいて、そこの政治、教育のシステム、高い生活水準、優雅な生活様式を観察し、採用すべきものを選別した。またイオニアの一隅で伝承されていたホメロスの叙事詩を知り、それを故国に伝えるために集めた。

長年外国で過して、王が成人に達した頃、王やその周辺の人々と、民衆の双方からの要望に応える形で帰国した。いよいよ彼の構想の実現に着手するときがきて、デルポイにいて有名な神託を受けたが、これは一応リュクルゴスを激励していると読めるものの、例によっていろいろ他の解釈もできる。

そこでリュクルゴスのはじめたシステムの内容だが、第一に彼は28人からなる長老会を設置した。2人の王と民会との間に立つ中間的組織で、長老は王とともに議案の提案権をもち、民会は採否を決するだけで、議案の修正をする権限はないというものだった。

それからすさまじいスパルタ方式の話になるのだが、まず土地を全部公有化し、ラコニアの農地を自由耕作民に均等に、スパルタ市の土地を一定の広さの持分地に分割して市民に配分した。次に金銀の貨幣を追放して、重くて他国人には通用しない先史時代からの鉄の流通棒だけを認めたので、蓄財欲は消滅し、あらゆるぜいたく、華美なものは追放され、実用品だけが生産されるようになった。住居も粗末な木材を組み立てたものに限定された。国外への私的な旅行は禁止され、外国からの来訪者もきびしく制限された。

スパルタ・システムの中心は市民の共同食事の制度で、これは一律の質素な食事に慣れさせるとともに、その場合は国事についての議論や成人教育の場だった。共同食事への参加義務は王も例外ではなかった。この市民というのは実は戦士階級のこと、農業や職人の仕事に従事することは禁止され、戦時以外は暇で、国事や自他の身体的、精神的訓練、若者の教育、狩猟、自分の持分地を耕作する農奴の監督ばかりを考えている階層だった。男子は常に戦士の心構えで、掠奪結婚を旨とし、また結婚の共有制、劣弱な新生児の放棄、共同養育と学習の場としての少年隊の組織、軍事や耐乏生活の訓練には、盗

みによる調達訓練も含まれていたという。これらと並んでまた誇りや徳性のきびしい訓練も含まれ、詩や歌も重視されていたという。

A：どうも恐るべきものですね。でも現代のある種の国のいき方とも、発想については通じる点が……。

Ω：日本の武士社会の雰囲気とも無縁とはいえないような気がする。リュクルゴスは社会を成文法によってこのようにしるのではなく、これが市民たちの血肉となるように教育することで、社会に定着させようとした。このきびしいシステムは、侵入したドーリス人の人口が比較的少なく、多数の先住民に対する完全な支配力を維持するために必要だったのだらうと解釈されている。

これらのシステムがスパルタに実施され、定着したように見えても、市民たちの内心にはその緩和要求の底流があった。システムの永久化をはかることを考えたリュクルゴスは、システムの実施結果について、デルポイの神託を受けにくから、自分が帰国するまでは決して、システムを改変しないようにと説いて、王、長老、民会の誓約をとりつけてから出発した。デルポイで最高の評価を示す神託を得たのでそれをスパルタに書き送り、自分はそのまま帰国せず、国外で生を終わった。

誓約によって改変できなくなったリュクルゴスのシステムは、前5世紀の終わりまで守られた。スパルタは軍事的にはついにペロポネソス半島の統一さえできなかったが、しかし自由主義的なアテナイと並んで、ギリシャの指導的国家の双壁だった。諸都市が連合して陸上で行動するときには、スパルタ人の指揮を望んだ。このようなスパルタの人間像については、後でまたふれる機会があるだろう。しかしこのシステムの下でスパルタは、文芸、思想、美術、建築の点では、後世になにも残さなかった。トウキュディデースは、“スパルタが今の時代にアテナイに匹敵する強大国だったといっても、後世の人にはとうてい信じられないだろう”，といっている。

前5世紀末に、27年にわたるペロポネソス戦争でスパルタが宿敵アテナイを屈服させた時に、このシステムもまた崩壊した。その時がスパルタの国力の頂点だった。

ところで君のシステムの定義を聞かせてもらおうか？

A：いやお話を聞いているうちに、社会システムといえどこういうものも含むことになってしまうのかな、という感じがしてきたところです。この点についてはまた考えてみることにしたいと思います。（つづく）

（わたなべ・ひろし 筑波大学社会学系）